

93/09/26

プルトニウム利用

大阪で共催 初のシンポ

高速増殖炉「もんじゅ」の臨界が来春に予定されるなどプルトニウム利用が始まろうとしている中、増殖炉推進派の日本原子力産業会議(原産)と反対派の原子力資料情報室が共催で二十五日、大阪市内でシンポジウム「今なぜプルトニウムか」を開いた。核エネルギー問題で意見を異にする両団体が共催するシンポジウムは初めてで、三百人の定員に五千三百人の申し込みがあり、関心の高さを示した。シンポジウムは双方の立場の三人ずつがパネリストになり、発言。その後、討論に入った。

菊池三郎・動力炉核燃料開発事業団企画部長は「世界の人口は二〇三〇年には百億人になり、エネルギー消費量も二、三倍になる。ウランの資源量は今後七十四年分は残っているが、プ

ウラン資源60倍に

毒性高く技術未熟

推進派

エネルギー消費、認識にズレ

反対派

ルトニウムにして利用すれば六十倍になる。資源、経済性、核不拡散、安全性、環境の五つの調和を考えて利用したい」とプルトニウムの必要性を強調した。

一方、高木仁三郎・原子力資料情報室代表は「プルトニウムは毒性が高く、利用技術も未熟で、危険。核拡散の点からも問題だ。各国がプルトニウム利用から撤退している。電気の不足よりエネルギーの大量使用が地球環境を危うくしていることが問題。六十倍という夢を語るのではなく、総括する時代に入った」と反論した。

経済性では、横手光洋・関西電力原子燃料部長が「価格はウランより約一〇%高いが、技術の進歩で差は縮まる」と主張。高木代表らは「その算定から多額のプルトニウム抽出費を省いているのはおかしい」と指摘した。

終了後の記者会見で、原産の森一久・専務理事は「認識の開きは大きい。プルトニウム利用の長期計画は、公聴会を開いてから決めるべきだ」と言い、高木代表も「国側と討論する場を設けたい」と話していた。

「日本国憲法」の盛り込み「調査の衛星による意見

推進・反対両派が対話

プルトニウム利用めぐりシンポ

国、情報公開改善の姿勢

プルトニウム利用の是非をめぐる、推進側の日本原子力産業会議と反対派の原子力資料情報室が共催するシンポジウム「今なぜプルトニウムか」が二十五日、大阪市内で開かれた。これまでの対決から、対話

と歩み寄りの糸口を探そうとした初の試み。三時間半の討論では、反対派が原子力情報の公開を強く迫ったのに対し、国側も前向きな姿勢を見せた。主催者はいずれも、冷静な議論ができたとを評価、「できれば

続ける」と口をそろえた。パネリストは動力炉・核燃料開発事業団の菊池三郎企画部長、資料情報室の高木仁三郎代表ら両派三人ずつ。三百人の会場は満員で立ち見もでた。

高木氏はすでに生じているプルトニウム利用社会の最大の問題として情報管理強化をあげ、「フランスからプルトニウムを輸送したあかつき丸が国内の核物質輸送に関する情報を秘密にしたことで、国内外の不安をあおり、非難が高まっている」と批判した。

小林圭二・京大原子炉実験所助手は「高速増殖炉の安全性を専門家として評価するに必要なデータが入りにくい」と、技術情報の秘密性を指摘した。これらの意見に対し、会場にいた科学技術庁の森口泰孝・核燃料課長は「青森県六ヶ所村に建設中の再処理工場の情報もあわせ、情報公開については一歩一歩前進させていきたい」と発言、改善の姿勢を示した。

推進・反対派が同席

プルトニウム再利用 大阪市内でシンポジウム

使用済みの核燃料に含まれるプルトニウムを再利用すべきか。派が同じテーブルにいた初のシンポジウムが二十五日、大阪市内で開かれた。原子力関連企業は必ずしも論点がかみ合わない

かったが、情報公開につながるシンポジウムの開催に参加者の反応は好評だった。推進派のパネリストは「将来ニウム利用はエネルギー供給の足しにはならないどころか、情報公開制限が社会的な悪影響が大きい」と反論した。

議論は平行線

推進・反対派初の共催シンポ

高速増殖炉「もんじゅ」の臨界が来春に予定されるなどプルトニウム利用が始まろうとしている中、増殖炉推進派の日本原子力産業会議（原産）と反対派の原子力資料情報室が共催で二

十五日、大阪市内でシンポジウム「今なぜプルトニウムか」を開いた。核エネルギー問題で意見を異にする両団体が共催するシンポジウムは初めてで、三百人の力炉・核燃料開発事業団の

みがあり、市民の関心の高さを示した。シンポジウムは双方の立場の三人ずつがパネリストになり、発言した。「もんじゅ」の建設主体である動力炉・核燃料開発事業団の

菊池三郎・企画部長は「世界の人口は二〇〇年には百億人になり、エネルギー消費量は二・三倍になる。ウランの資源量は七十四年分は残っているが、プルトニウムに利用すれば六十倍になる。資源、経済、安全、環境の五つの課題を考慮して利用したい」とプルトニウムの必要性を強調した。

一方、高木仁三郎・原子力資料情報室代表は「プルトニウムは毒性が高く、利用技術も未熟で、危険。核拡散の点からも問題だ。各国がプルトニウム利用から撤退している。電気の不足が地球環境を危うくしていることが問題。六十倍という夢を語るのではなく、現実化する時代に入った」と反論した。

経済性では、横手光洋・関西電力原子燃料部長が「価格がウランより約一〇

倍高いが、技術の進歩で差は縮まる」と主張。高木代表は「その算定から再処理工場による多額のプルトニウム抽出費を省いているのはおかしい」と指摘した。

終了後の記者会見で、原産の森一久・専務理事は「認識の開きは大きい。プルトニウム利用の長期計画は、公聴会を開いてから決めるべきだ」と言い、高木代表も「国側と討論する場を設けたい」と話していた。